

理科の目標の枠組を超えた成長が期待できる授業とは — 人間形成に迫る理科教育の意義 —

- 理科の授業では、探究的な活動が最も少ないのが中学校
「問題解決」の小事、「理数探究」「総合的な探究の時間」の高理。
(入試のせいにして) (相変わらず) 教師主導の知識伝達の一斉授業が中心の中学校。
- 枠組みを超える以前に、理科の目標の枠組の達成が先ではないか。
教師主導から生徒中心の授業へ、ファシリテーターとしての教師。
- 授業をする際の立ち位置(足場)を、指導内容から移す
「探究をするために必要な資質・能力の育成」が立ち位置(足場)。
「覚えましたか?」「できるようになりましたか?」ではなく「解決できましたか?」「納得できましたか?」
- 探究的な学びの充実を語るには? → 探究の過程を意識し、柔軟に取り組む
学ぶ意欲や課題の設定が先で、学習過程の系統性は、むしろ後付けでよい。その意味で学習順序は生徒が決める。
- そもそも「人格の完成」を目指してる。それに、ふさわしい学習場面は「家庭教師」か「学校教育」か。
- 個別最適な学びを実現するための協働的な学び
学びを孤立化させない。その意味での話し合い活動。探究活動との整合性が高い単元内自由進度学習。

R8中教審【「探究」の新しい定義付け】

実社会・実生活との関わりの中で見出す自己の興味・感心や問題意識に基づき課題を設定し、教科等の学びを必要に応じて活用し、試行錯誤しながら、課題解決を通じた新たな価値の創造を繰り返していく学習のプロセス。

長い歴史がある上級学校への入学試験は、社会に受け入れられているシステム。「なくした方がよい」という意見もあるが、選抜の必要性そのものはなくせない。

質問紙での「一発」選考は、方法として公平性・平等性が担保されている。日本では、保護者も含めて幅広い世代が自分のこととして経験をしており、定着している。